



統計から社会の実情を読み取る

第88回 若者の安定志向と草食化

本川 裕 | Honkawa Yutaka

アルファ社会科学(株)主席研究員

■東京大学農学部農業経済学科卒。財団民経研究協会常務理事研究部長を経て、現職。元立教大学兼任講師。農業、地域、産業、開発援助などの調査研究に従事。現在は、ネット上で「社会実情データ図録」サイト(<http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/>)を主宰するかたわら地域・企業調査等を行う。著作は、「統計データはおもしろい!」(技術評論社、2010年)、『統計データが語る日本人の大きな誤解』(日本経済新聞出版社、2013年)等。



終身雇用志向が強まった新入社員

若者については、リスクを犯したがらない「安定志向」と異性関係に淡白であることを示す「草食化」が近年の特徴だとされる。今回は、それらを示すデータを紹介することにしよう。

若者の安定志向を表すものとして、新入社員の終身雇用志向が1970年代以降どのように推移しているかを図1に示した。

図は、日本生産性本部が新入社員研修の場で1970年ごろから継続的に行ってている「働くことの意識」調査において、「この会社ですと働きたいと思いますか」という質問への回答として、終身雇用志向を表す「定年まで働きたい」の割合を示したものである。

この割合は、1982年に28%とバブル期以前のピークとなった。これは、当時の日本経済の好調を背景に、『ジャパン・アズ・ナンバーワン』(社会学者エズラ・ヴォーゲルによる1979年の著書)に代表される世界的な日本の高評価に影響されて、日本人が、日本の経営やその要素と見なされた終身雇用に自信を深めていたことの表れであると見なすことができ

よう。

ところが、1980年代後半のバブル経済期には「定年まで働きたい」の割合が急速に低下した。不動産バブルに代表される当時のヒートアップした経済環境の中で、一生を一企業のサラリーマンとして勤め上げるというような地味なライフスタイルは流行遅れと見なされるに至ったものと考えられる。

その後、バブルがはじけた1990年代の失われた10年、そして、2000年前後の就職氷河期の時期には、「定年まで働きたい」の割合が低迷するとともに「状況次第でかかる」の割合が大きく上昇した。

これは、志望どおりの就職先ではないので「定年まで働きたい」とは思えないという意識からと一般に解されている。また、その後、リーマンショック(2009年9月)まで「定年まで働きたい」と思う新入社員が増えたのも、就職環境が改善して意に叶った就職先に入社できる者が多くなったからと考えられている。

もちろん、そういう側面もあったろうが、終身雇用が当然と考えられていた1980年代のピークを大きく上回るような「定年まで働きたい」の割合の上昇幅

の大きさはそれだけでは理解しにくい。やはり、2000年を少し過ぎた頃から若者の安定志向が増したと見なした方がよかろう。

すなわち、1980年代のように終身雇用がシステムとして機能していると思っているわけではないが、せっかく正社員として就職できた企業なのだから長くお世話になろうという新入社員の気持ちを表していると考えられる。非正規雇用の拡大という雇用環境の変化が、こうした意識変化を生んでいると言えよう。

これは、同じ調査の別の設問で、新入社員の入社動機のうち

「会社の将来性を考えて」を最重要視する回答率がバブル期までは20%以上だったのに対して、2000年以降は10%以下を続けていることからもうかがえる。すなわち、積極的な選択としての終身雇用から消極的な選択としての終身雇用に新入社員の意識が変化したのである。

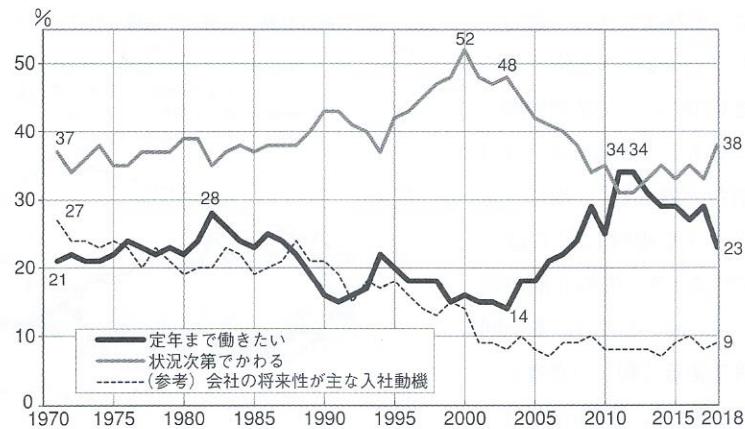
将来性があるとも思ってもいない企業に、以前より強く身を寄せたいと感じざるを得なくなっているわけであり、就職に昔のような届託のない明るさがないのも当然であろう。

ところで、2013年からアベノミクスがはじまるとき、就職状況が劇的に改善し、「定年まで働きたい」の割合は低下に転じ、むしろ、若者は終身雇用にこだわらなくなっている。安定志向を上回って今後の経済に安心感を見出すようになったのか、それとも、安定志向から脱し、リスクをとる志向へと転じたのであろうか？

異性との交遊に生きがいを感じなくなった若者

異性関係に淡白な若者を意味する「草食男子」

図1 新入社員の終身雇用志向の長期推移



注) 新社会人研修村に参加した企業の新入社員に対して行った調査における択一選択肢の二つの設問の結果。「この会社でずっと働きたいと思いますか」という問い合わせに対する回答選択肢は3個、すなわち「定年まで働きたい」、「とりあえずこの会社で働く」「状況次第でわかる」。参考は「会社を選ぶとき、あなたは、どういう要因をもっと重視しましたか」という問い合わせであり、回答選択肢は13個、すなわち「自分の能力・個性が生かせるから」、「仕事がおもしろいから」、「技術が覚えられるから」、「一流会社だから」、「会社の将来性を考えて」、「経営者に魅力を感じたから」ほか。

資料) (公財)日本生産性本部「新入社員「働くことの意識」調査報告書」

という用語は、2006年10月にコラムニスト・編集者の深澤真紀によってはじめて使われ、2008～2009年には流行語となった。しかし、実際のところ、草食男子は、徐々に現れてきたのか、それとも急に現れたのか、もし急に現れたのなら、何時頃からなのか、を示すデータは、当時、なかなか見つからなかった。草食化に限らず、新しく登場した状況は、事態がかなり進んでからそれに関する設問が意識調査などで設けられるようになる。そのため、それが何時からかを明らかにするのは、案外、難しいのである。

意外なところにこうした疑問に応じられるデータが発見されたのでここに紹介する。

それは、上でも引いた日本生産性本部の「働くことの意識」調査である。この調査の中に、「職場以外では、どんな時に一番生きがいを感じますか」という設問がある。選択肢の一項目として「親しい異性といふとき」があるが、これを選択した若者の割合で、異性間交遊への関心度をうかがうことが可能なのである。

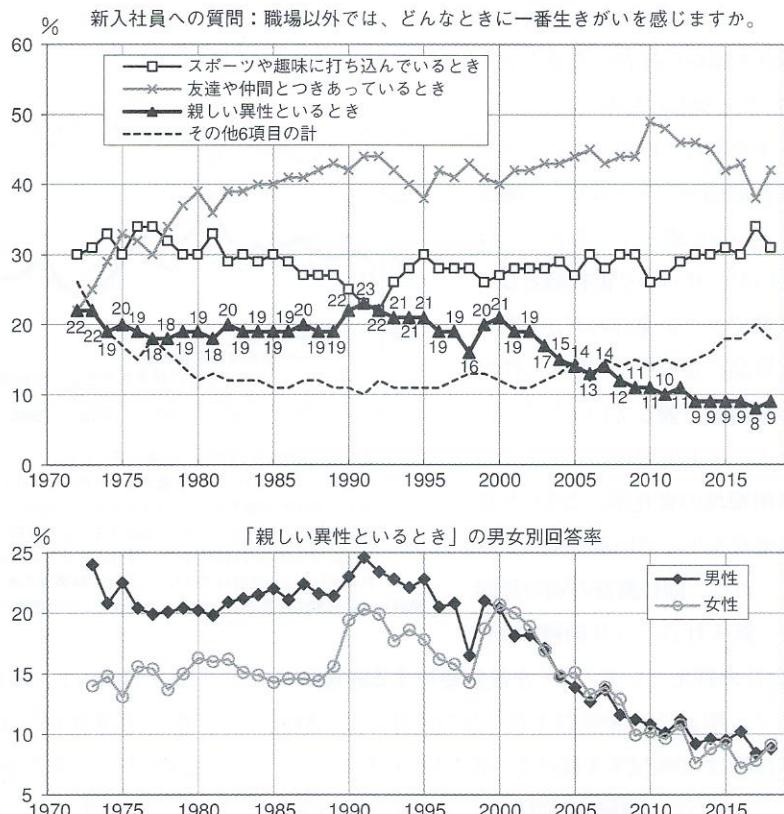
この設問への回答結果は、それほど変化の激しいものではない。上位三つの選択肢は、「友達や仲間とつきあっているとき」が4割台で最も多く、次に「スポーツや趣味に打ち込んでいるとき」の約3割が続いている。3番目に多い回答である「親しい異性といふとき」は、以前はほぼ2割前後で安定的に推移していたが、2000年頃から、傾向的に低下がはじまり、最近では1割を下回っている。

昭和20年代生まれの私の経験では、高校や大学のクラスには、かならずと言つていいほど、一定の割合で、同性同士の遊びよりも優先して、女の子とのつきあいに生きがいを感じているように見える者がいたものである。こういう異性間交遊優先の者が2000年頃を境に10数年で半減したのである。これを草食化の進展と言つてもよいと思う。

この意識調査の回答者である新入社員は男性ばかりではない。この調査がはじまってから今までに2割台から4割台へと女性比率は上昇している。従って、男女計でのこうした意識変化は、女性比率の増大によるものとの疑いが残る。そこで、図2には、「親しい異性といふとき」と回答した者の男女別の比率の推移を追った図も加えている。

これを見ると、男女ともに2000年頃から比率が低下しており、草食化がこの頃からはじまっている

図2 草食男子はいつごろ現れたか



注) 新社会人研修村に参加した企業の新入社員に対して行った調査結果。選択肢のその他6項目は「家族といふとき」「親がよろこんだとき」「一人でいるとき」「自己啓発のとき」「社会に役立っているとき」「なにもしていないとき」だが、いずれも、いままで10%未満。

資料) (公財)日本生産性本部「新入社員「働くことの意識」調査報告書」

ことが裏づけられる。そればかりでなく。もう一つの特徴、すなわち、2000年頃から、男女差がなくなつたという事態の変化にも気づかされる。

2000年頃までは、異性間交遊を生きがいとする若者については、男性が女性をほぼ5%程度上回っていた。つまり、男は肉食系、女は草食系の傾向があったと見なすことができよう。これは、古今の小説や戯曲などでも、いわば当然の前提とされてきたことである。実際には、女性が男性より異性に関心がないということはなかろうが、意見の表明や行動パターンとしては、そういうことになっていたのである。

ところが、これが、2000年頃、すなわち世紀の

変わり目で、男女同等へと大きく変化したのである。そして、2000年代では、むしろ、女性の方が回答率で男性を上回り、異性交遊に男性より積極的という結果となった年も多かった。「肉食女子」という言葉が「草食男子」と対で説得力をもったのもうなづける状況である。なお、「肉食女子」が現れたのは、バブルが崩壊しつつあった1990年からであることにも図から見て取れる。まさにお立ち台で踊るボディコンギャルによって一世を風靡したディスコ「ジュリアナ東京」の開業時期(1991~94年)が転換点だったことが分かる。

男の方から女にアプローチするのが当然という価値観が歴史的に長く続いていたことを思うと、これは、大げさに言えば、文明史的な変化とも言える。そして、データの推移からは、バブル期の狂騒の余韻が収まつた2000年頃を境に、異性への関心度における男女差が消滅するとともに、異性交遊に関心が薄れるということを意味する「草食化」が男女そろってどんどん進みはじめたわけである。

より細かく時系列変化を見ると、バブル崩壊後の1990年代前半の数年、男女ともに「親しい異性といふとき」を一番の生きがいにする若者が増大した点が目につく。そして、それまで控え目な態度を示していた女性の積極化が特に目立っている。

本誌前々月号の「日本人の塩分摂取」でも見るように、低下傾向を続けていた日本人の血圧や塩分摂取量はバブル期に一時期上昇したが、バブル崩壊後の1990年代前半にはなお上昇を続けていた。実は、バブル現象の精神的側面は経済的なバブル崩壊後に顕著となっていたのだった。バブル経済が崩壊したにもかかわらず、不良債権問題に象徴されるようにそうした状況への適応、清算は先延ばしにされ、精神的には狂騒状態がしばらく続いていたのである。ここでのデータも同様の状況を示していると言える。

もう一つの短期的な時系列変化としては、1998

年の新入社員は、「親しい異性といふとき」を一番の生きがいにする者が、ぐっと減った点が目に付く。これは1997年秋の三洋証券、北海道拓殖銀行、山一証券と立て続けの大型金融破綻事件がついにバブルの狂騒に終止符を打った影響と見ることができる。年間の自殺者数が一気に1万人増えて3万人台を突破したのも1998年である。この年の新入社員は、異性と楽しく浮かれている場合ではないという気分に襲われたのであろう。ところが、翌年の1999年、翌々年の2000年にはこうした異例とも言える状況からの回復が見られた。そして21世紀に入ってから、いよいよ、上記のような草食化を示す傾向的低落が本格化したのである。

なお、2013年からは草食化の傾向はほぼ横ばいに転じており、状況に変化の兆しが見られないでもない。

さいごに

以上のように、データから見る限り、若者の安定化志向は2004年から顕著となり、2013年から逆転傾向となっている。草食化は、2001年から顕著となり、2013年に横ばいに転じている。両者はほぼ同様の起伏をたどっていると言えよう。これらが、何故その時期からなのか、また何の要因でそうなったのかについては、いまだ、説得力ある説明を思いつかない。

実は、各種の時系列データを調べていると、時期的に同じ起伏をたどっているものがある。日本人のたんぱく質摂取量は、これまで横ばいだったのが、2000年頃を境に大きく減少に転じ、2011年を底に、横ばいかやや増加の傾向に再度転換している。たんぱく質摂取は肉食ということとほぼイコールなので、食事の草食化自体が、若者の安定化や草食化という精神的傾向を招いているようにも見える。余りに出来すぎている話であるし関係があるかどうかも怪しいが、気になる事実である。